

機関番号：32411
 研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2008 ～ 2010
 課題番号：20520173
 研究課題名 (和文) 女性による日記・書簡文学と公的領域形成—比較文学的視点を交えて—
 研究課題名 (英文) Women's diary and epistle literature and the public sphere in Japan, Britain, and the US: a comparative study
 研究代表者
 吉野 瑞恵 (YOSHINO MIZUE)
 駿河台大学・現代文化学部・教授
 研究者番号：00224121

研究成果の概要 (和文)：英文学研究で用いられている life-writing という概念の普及について確認するとともに、平安時代と明治時代の日本・18～19世紀の英国・アメリカにおいて女性による日記、書簡、自伝が、「私的な世界を語る」というかたちをとりながら、後世の読者に参照すべき女性の生き方の例を示したり、「私」の経験を公的なモデルとしていくなど、「公的」な領域に参入する手段として用いられていることを明らかにした。加えて、私的な領域の中に「国家」が侵入し、女性が国家にからめとられていく過程についても考察し、私的領域と公的領域の交錯というテーマのさらなる可能性を確認した。

研究成果の概要 (英文)：This study looked at women's diaries, letters, and autobiographies in Heian and Meiji Japan, the 18th- and 19th-century Britain and the United States. It explored the way how they help shape the public sphere, even as, or perhaps because, they use this 'private' literary form. As recent English criticism employs the term 'life-writing' and reconsiders the genre's multiple, including social and political, aspects, the study demonstrated that a number of women's 'life-writing' examined here ingeniously transform their 'private' life and experience into relevant public models, or use the genre as a kind of disguise to gain an access to wider contemporary debate. The research also suggested further possibilities of the exploration of this interplay of 'private' and 'public' in women's life-writing by examining a Japanese example in which the 'private' language of the state emotionally mobilizes women to collaborate with public and national concerns.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：日記文学 国際研究者交流 書簡文学 比較文学 公的領域

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

本研究は、駿河台大学における共同研究「メディアとしての文学」を推進する過程で得られた知見から発展したものである。この共同研究では文学作品のもつメディアとしての側面について、日本および英国・合衆国の具体的な事例について調査発表が行われた。その過程で、共通の論点として浮上してきたのが日記・書簡のもつ「公的」な性格であり、特にその女性との関係であった。「私的」な日記や書簡という従来の一般認識を覆しつつ、時代や対象国を異にする発表に共通する一定の特徴が見られたことになり、日記・書簡の公的な性格と女性による公的領域の形成との関連という論点を、詳細にして比較文学的な検討に値する研究課題として導くことになった。

また、女性作家の日記・書簡文学をめぐる研究状況に関していうならば、平安時代の日記文学研究においては、「私的」とされてきた女性の日記の公的な側面に焦点が当てられるようになってきた。また、近代文学研究においても、女性作家が国民に編成されていく過程を解明する研究が進展しており、女性作家の日記もそのような観点から注目されている。

いっぽう英語圏文学においても女性作家の掘り起こしの作業を経て、近年は旅行記などの文筆活動を通じた女性による公共圏形成のありようが新たな検討課題として位置づけられるようになってきた。また、日記・書簡文学が life-writing というジャンルとして概念化され、女性による公的領域形成の一手段としてとらえることが可能になっている。

2. 研究の目的

本研究は、古代から近代に至る日本の女性作家による日記・書簡文学の持つ「公的」な性格に着目し、女性が日記や書簡文学を「書く」ことと、公的領域の形成・拡大との関わりを、英語圏文学研究で近年注目されている「life-writing」という概念を援用しながら、英米の女性作家の日記・書簡文学との比較も交えて明らかにすることを目的とする。本研究はそれらを統合する視点のもとに、日記・書簡というジャンルが、女性による公的領域の形成・拡大の試みといかに接続していったかを明らかにし、このジャンルの研究に新しい局面を切り開こうとするものである。さらに本研究は、日本文学研究と英語圏文学研究の研究成果を相互に参照する機会を積極的に提供し、女性作家による日記・書簡文学の性格を、領域を横断して明らかにするこ

とも目的としている。

3. 研究の方法

(1)研究代表者・吉野瑞恵は、平安時代の女性作家による『蜻蛉日記』と鎌倉時代の『とはずがたり』を主たる対象とし、平安時代から鎌倉時代の宮廷女性にとって日記という媒体が持っていた意味を考察し、さらには各々のテキストにおける「公」と「私」との接続のありようを分析することを通して、日記や自伝というジャンルと女性の公的領域形成との関わりを明らかにする。日本の平安時代は、日記文学の研究がもっとも蓄積されている分野であり、ここでの検討を、以下の議論における参照点とすることをめざす。

(2)研究分担者・松井優子は、女性による日記・書簡文学にたいする認識の拡大の一例として、「life-writing」というジャンルについて調査を進め、本研究で収集・検討された資料を整理し、総合的に討議する土台とする。あわせて19世紀の英国ヴィクトリア女王による『ハイランド日誌』(1868、1884)における「公」と「私」との接続のありようを分析する。

(3)研究協力者・志渡岡理恵は、この議論をうけ、西洋における公共圏形成期としての18世紀から19世紀初頭における英国人女性、なかでも、シエラレオネ植民計画の責任者の妻 A.M. ファルコンブリッジの滞在記(1794)と、ジャマイカ総督夫人マライア・ニュージェントの日記(1801-1805)に関する資料の収集と位置づけをおこない、その公的な性格のありようを明らかにする。

(4)研究分担者・増田久美子は、南北戦争期アメリカ合衆国の黒人女性シャーロット・L・フォートンによる日記を取り上げ、上での議論を検証する。フォートンの日記に見られる政治的・社会的問題への姿勢を分析し、フォートンという黒人女性が日記を通して南北戦争期の公的領域とどうかかわっていたのかを考察する。

(5)研究分担者・菅聡子は、樋口一葉の日記を主たる対象として、テキストの中に「国民」概念がどのように立ち現れているか具体的に分析することを通して、明治期の女性作家と公的な領域との関わりを明らかにし、これまでの議論を統一する視点の導入をめざす。以上のように公的なテキストとしての日記・書簡の調査を行うと同時に、その特徴とそれらを通じた女性の公的領域形成と拡大の様相を、比較文学的な視点から総合的・多

角的に理解・評価することをめざす。

4. 研究成果

5.

(1) 2008年度は、まず研究協力者・志渡岡理恵に資料収集を依頼して、life-writingという概念が英語圏文学研究においてどのように理解されているのかを確認した。その結果、この概念が広範に用いられて、いまだ共通理解に至っていないものの、今回の研究で用いるのに適切な概念であることが明らかになった。

当該年度に開催した2回の研究会では、研究協力者・志渡岡理恵による18世紀英国女性の自伝に関する研究発表、韓国から招聘した李愛淑（韓国放送大学教授）による前近代の韓国女性の自伝についての研究発表がなされた。これらの発表を通じて、どちらも明確に読者を意識したものであることが指摘され、自伝というジャンルが時代や地域を越えて、公的領域形成と密接な関わりを持っていたことが明らかになった。

以上のような成果をふまえて、吉野瑞恵は、中世の宮廷女性の自伝である『とはずがたり』を研究対象とし、この作品の中では公的領域に参入する回路となっているものは何かに注目した。

(2) 2009年度は2度にわたって研究会を開催し、時代の異なる二つの女性作家による日記を、和歌という共通する観点から分析することを試みた。

8月に開催した研究会では、菅聡子が樋口一葉日記の表現分析を通して、この時代の女性作家の日記において公/私領域についての認識がどのように形成されているか、とくに国家情勢とのかかわりの中で言説が形成されているありようについて検証した。

さらに2月に開催した研究会では、中世日本の宮廷女性の自伝である『とはずがたり』の執筆意図に焦点をあてた吉野瑞恵の発表がなされ、宮廷の秘事を描いたこの作品が、実生活を題材にしつつ明確な創作意識をもって書かれていること、さらに作中に書き記された和歌が公的領域への回路となっていることを検証した。

樋口一葉日記と『とはずがたり』という時代が隔たった二つの作品の双方において、和歌が重要な役割を果たしているが、前者においては和歌がナショナリズムの言説を形成していくものとして、後者においては、和歌を書き記すということが、当時の女性にとって公的領域に参入する手段であったことが明らかになった。いずれにしても、日本の女性作

家の日記や自伝において、公的領域と私的領域の交錯を考える際には、和歌が重要なポイントになることを確認した。

また、2月には吉野瑞恵が韓国放送大学の日本学科学術セミナーにおいて、日本の女性作家による日記文学（『蜻蛉日記』および『とはずがたり』）が、私的な世界を語るという形をとりながら、実は明確に読者を意識して女性の人生を語り伝えるという側面を持っていたことを明らかにした。このセミナーにおける意見交換を通して、ここまで私的な世界を書き記したことの前提条件という問題が浮上り、さらにこのテーマを追究するための示唆を得た。

(3) 2010年度は8月に研究会を開催し、増田久美子によってスウェーデン人女性作家のアメリカ見聞録を扱った発表が行われた。ここではアメリカの家庭の特質をみすえつつ、スウェーデン人女性全体の公的領域の拡大を期待するという、旧世界と新世界のトランスアトランティックな視点をも明らかにされた。次に松井優子が英国19世紀の二人の女性のハイランド地方の旅行記に焦点を当てた発表を行った。ここでは書簡集という形式が女性が書くことを容易にしていること、さらには家庭生活という私的な領域を書くことが公的な領域につながっていくのが明らかになった。

また2月には韓国放送大学日本学科学術セミナーにおいて松井優子研究成果の報告を行い、「日記・書簡文学」というジャンルについて比較文学的な視点から意見交換を行った。

以上のように、平安時代と明治時代の日本および18～19世紀の英国・アメリカにおいて女性による日記、書簡、自伝が、「私的な世界を語る」というかたちをとりながら、後世の読者に参照すべき女性の生き方の例を示したり、「私」の経験を公的なモデルとしていくなど、「公的」な領域に参入する手段として用いられていることを明らかにした。本研究によって、女性が「私」の経験を書くということを戦略的に用いながら、公的な領域の形成と拡大をはかっていたことが検証された。

また、国民国家の枠によって垣根が作られている文学研究においては、研究成果の相互参照がしにくい状態にあるが、今回の共同研究によって、相互の研究成果を生かしつつ、新たな視点を得ることが可能になった。また、日本文学研究の内部でも、近代と前近代には深い溝があるという認識があるが、本研究によって特に女性作家の表現にアプローチする際には、前近代と近代の連続性に注目すべきであることが明らかになった。

6. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

菅聡子、林芙美子『戦線』「北岸部隊」を読む—戦争のジェンダー、敗戦のジェンダー、表現研究、査読有、92号、2010、25-32。

菅聡子、〈女の友情〉のゆくえ—吉屋信子『女の教室』における皇民化教育—、お茶の水女子大学 人文科学研究、査読有、第6巻、2010、1-13。

増田久美子、ボーディングアウトする女、家庭にしがみついた男——(反)ボーディングハウス小説におけるセアラ・J・ヘイルのドメスティック・イデオロギー、査読有、アメリカ研究、45号、2010、75-96。

増田久美子、「ホーム」から「要塞」へ——フランク・J・ウェッブ『ゲーリー家と友人たち』における黒人ドメスティシティ、駿河台大学論叢、査読無、38号、2009、23-37。

菅聡子、〈よろめき〉と女性読者、文学、査読無、第9巻2号、2008、54-68。

菅聡子、円地文子「女坂」支配と叛逆、国文学解釈と鑑賞、査読、2008、第73巻、第4号、103-108。

菅聡子、女性作家・樋口一葉と〈われ〉の生成—詠歌行為の視座から—、文学、査読無、第9巻4号、2008、61-73。

[学会発表] (計3件)

菅聡子、林芙美子は敗戦をどう語ったか—戦場のジェンダー、敗戦のジェンダー、第47回表現学会全国大会、2010年6月5日、於お茶の水女子大学。

松井優子、ライフ・ライティングというジャンル——二つのハイランド通信を手がかりに、韓国放送大学日本学科学術セミナー、2011年2月14日、於韓国放送大学(ソウル市)。

吉野瑞恵、日本女性と日記文学、韓国放送大学日本学科学術セミナー、2010年2月22日、於韓国放送大学(ソウル市)。

[図書] (計5件)

吉野瑞恵、明石書店、ジェンダー史叢書第3巻 思想と文化、2010、284 (277-278)。

吉野瑞恵、翰林書房、源氏物語の歌と人物、2009、461 (227-246)。

松井優子、あるば書房、文学都市エディンバラ——ゆかりの作家たち 2009、391 (125-151)

吉野瑞恵、小学館、日本の古典を読む7 土佐日記・蜻蛉日記・とはずがたり、2008

、318 (303-313)。

松井優子、晶文社、ロバート・バーンズ—スコットランドの国民詩人、2008、601 (457-474)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉野 瑞恵 (YOSHINO MIZUE)

駿河台大学・現代文化学部・教授

研究者番号：00224121

(2) 研究分担者

菅 聡子 (KAN SATOKO)

お茶の水女子大学・人間分化創成科学研究科・教授

研究者番号：70224871

松井 優子 (MATSUI YUKO)

駿河台大学・現代文化学部・教授

研究者番号：70265445

増田 久美子 (MASUDA KUMIKO)

駿河台大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：80337617

(3) 研究協力者

志渡岡理恵 (SHIDOOKA RIE)

大妻女子大学非常勤講師